

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

木ノ脇 悦 郎

1531年9月に新版の『対話集』を出版したエラスムスは、その叛に新たな五つの新作対話を加えている。*Concio sive Merdardus*, *Philodoxus*, *Opulentia Sordida*, *Exequiae Seraphicae*, そして *Amicitia* である。そのうちの二つ、*Concio sive Merdardus* とここに訳出した *Exequiae Seraphicae* は、どちらもフランシスコ会の現状に対して批判と嘲笑を加えた作品であるといえる。前者の *Concio* (『説教』) は、1530年、アウグスブルク国会の終わりにハンガリー王フェルディナンドの王室説教者であるフランシスコ会士、Medardus が王とその妹メアリーの前でなした説教についての皮肉な対話である。

よく知られているように、1516年に校訂版新約聖書、*Novum Instrumentum* を出して以来、保守的神学者からの批判が絶えなかったエラスムスであるが、Medardus もその説教でルカ福音書第一章の「マリアの讃歌」に関するエラスムスの解釈を批判したのである。エラスムスは単なる誹謗中傷に対しては、激しくこれを怒り、反論を加えるのであるが、この場合も『対話集』の中で取り上げて論じたのである。しかも、対話の中でその話者を Merdardus という名に変えて、笑い飛ばすのである。つまり、Merdardus は merda (糞) を語源とする名前なのである。

また、*Exequiae Seraphicae* (『熾天使の葬儀』…熾天使は聖フランシスコに付けられた別の名称であり、それをフランシスコ会にあてはめたもの) では、死者にフランシスコ会士の衣をかけておくことが、あたかも天国への入り

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

口であるかのような迷信的習慣を中心に批判が加えられている。この対話の背景になっている事柄は、1531年1月7日に死んだ Alberto Pio (1475–1531、イタリア、カルピの君主であり、後零落した人物で、人文学者ピコ・デラ・ミランドラの妹、カテリーナを母とする) のことである。彼は、1525年、エラスムスをルター派であるとして攻撃し、二人の争いは Alberto の死に至るまで続いていたのである。彼はその死に際してフランシスコ会の迷信的慣習に従い、死の三日前からフランシスコ会士の衣を纏っていたといい、その葬儀も同会の慣習に従って執り行われている（詳細は、1531. 3. 5 付書簡、Ep.2440、及び 1531. 8. 20付書簡、Ep.2522参照）。エラスムスは、Pio 即ち、ラテン語の「清い、敬虔」という語を同じ意味のギリシャ語に換え Eusebius と表記する。しかも、その人の町を Pelusium（ナイル東岸の町の名であるが、この場合は‘泥の町’とでもいうべきであろう）と名付け、人間の噂によるつまらない泥仕合をさえ暗示しているのである。このような痛烈な皮肉をこの対話は内容としているのであるが、だからといってエラスムスがフランシスコに対して尊敬の念を持たなかったというのではない。そうではなく、聖フランシスコ以後のフランシスコ会内部の抗争や、多くの人々を惑わす托鉢修道士の行為への批判、特に迷信的、非理性的な聖書解釈に対する憤りがこのような対話を生み出したものであると考えられる。

1520年代後半以降に書かれた多くの対話は、宗教改革期の歴史的な諸事件をその背景として持ち、またそれを素材として成り立っているのであるが、この対話もその例にもれず、フランシスコ会、ドミニコ会の対立やフランシスコ会内部の争い、あるいは、一般化した宗教的迷信を取り上げているので、16世紀キリスト教世界の現実を念頭に置きつつ読まなければならない。

一言付け加えると、この対話の話者である Phileous は phileo と akouo の合成語として「聞きたがり屋」を意味するし、Theotimus は「神を畏れる、敬虔な、熱心な」を意味するものとなっており、その対話の展開と併せてよくできた名前であるといわねばなるまい。

エラスムスの *Exequiae Saraphicae* (1531) について

ところで、本来ならば、本文の詳細な注釈を付けるべきものであるが、紙数の都合上、今回はこれを割愛し本文の全体を紹介してその全体像のみを提示することとした。完全な注釈付きの翻訳は、他日を期したいと願うものである。尚、この翻訳のための底本は校訂版のエラスムス全集、*Erasmi Opera Omnia* (ASD) I-3, P.686-699, Amsterdam, 1972 及びライデン版のエラスムス全集、*Desiderii Erasmi Opera*, Tom. I, (LB) p.866-873, 1703 (rep.1961) を用いた。

Philecous, Theotimus

(以下、それぞれに Phil, Theo と略記する)

Phil やあ、テオティムスさん、またえらく敬虔な顔をして、どこへ行っていたのです。

Theo 誰が、どうしたのですって。

Phil だって、厳格な顔付きで、じっと地面を見つめて、頭を左にかしげて、お祈りの数珠を手にはしていませんか。

Theo ああ、フィレコウスさん、あなたには関係のないことですが、お知りになりたいのであれば、私はちょっとした見物から帰る所なのです。

Phil 綱渡りですか、手品師の芸ですか、それともなにかほかのもの。

Theo 恐らく、あまり違いはないでしょうね。

Phil ですが、今までそんな顔で見世物から戻ってくる人を見たことはありませんよ。

Theo でも、そういう見世物だったのですよ。あなたがそこに居たら、多分私よりもっとショックを受けて帰ってきたはずですよ。

Phil では、何があなたをそんなに敬虔にしたのか話してごらんなさいよ。

Theo ある熾天使の葬式の帰りなのです。

Phil へー、天使も死ぬのですか、本当ですか。

Theo いや、そうではなく天使の仲間みたいなものですよ。しかも、あなたもご存知だと思いますが、このペルシウムでは有名で、しかも学問もあるエウセ

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

ビウスを勿論知っていますよね。

Phil 君主から私人になり、追放され、更に乞食になり、おまけにへつらいやになってしまったあのですね。

Theo よくおわかりになりましたね。

Phil しかし、彼に何が起ったのですか。

Theo 今日、彼が葬られまして、その葬列の帰りなのです。

Phil ああ、それでは当然悲しいはずですね。それほどの悲しみを持ち帰ったのですね。

Theo 私が見たことを涙無しに説明することは出来ないのではと、心配です。

Phil 私のほうは、嘲笑なしでは聞けないのではないかと心配ですが、まあ、お話になってください。

Theo 私はずっと前からかわいそうに、エウセビウスが身体を悪くしていることを知っていました。

Phil 私も、何年か前に体を弱らせているということを聞いたことがあります。

Theo ゆっくりと人間を弱らせていく病気の場合、医者や習慣として確かな予兆によってその死の日を予告するものです。

Phil 当然です。

Theo 医者や技術で保証できることは何であれ最大の注意でもって与えられるのだということを人々に思い出させてくれました。すべての医者や働きに比べれば、神は確かにもっと優れております。それに比べて人間の理解で捕らえることができるのは、人生のわずか三日にも満たないということも思い出させてくれたのです。

Phil それで、何があったのですか。

Theo かの有名なエウセビウスは、身体がすっかりだめになってしまった時に、聖なるフランシスコ会の衣を纏い、頭を剃られ、灰色の頭巾、同色の上着、結び目の多い縄の帯、サンダルを受けたのです。

Phil 死ぬところだったのですか。

Theo ええそうです。そればかりか、今にも死にそうな声で、医者や絶望して

エラスムスの *Exequiae Saraphicae* (1531) について

しまったが、もし神が命を与えてくれるならば、フランシスコ会則に従ってキリストの兵士になろうと約束したのです。この約束にたいして、その神聖さで有名な人たちが証人になったというわけです。そして、その有名な人はかの衣服をまとして医者に予告された時間に死んだのです。それで、その僧団から多くの人々がやってきて葬列を挙行したのです。

Phil 願わくば、そんな様子に出くわしてみたかったですね。

Theo もし、あなたがそこに居たら、涙を流していたことでしょうか。熾天使の仲間たちがその死体をどんなに愛情を込めて清めたことか。彼らは神聖な衣を彼に着せ、手を十字架の形に組ませ、足は裸足にし、剃髪にこころゆくまで接吻し、福音の教えに従って終油の油を顔に塗って晴れやかにしたのです。

Phil 埋葬人や死体運搬人も熾天使の仲間同様に驚くべき謙遜さで振る舞ったのでしょうかね。

Theo それから、彼らは棺に死体を横たえ、「互いに重荷を負いあいなさい」というパウロの教えに従って、自分たちの肩で兄弟を修道院までの道を選んで行ったのです。そこで盛大なミサの挽歌を歌い、葬りをしたのです。かの行列が道を通った時、多くの人々が涙を流しているのを私は見たのです。以前はこの人が紫布の衣や上布の衣を着ていたのに今はフランシスコ会士の衣、麻の帯を締めて、全身が信仰深い様子に整えられているのを見たからなのでしょう。ところが、死人の頭は肩の方へ曲がっており、手は先ほども言ったように、十字架に組まれていました。その他の事もすべて驚くほど敬虔な様子でした。それだけでなく、熾天使の群れは頸をうなだれ目を地面に落として、悲しみの歌を歌っていましたが、私は死者の霊でもそれほど悲しげに歌うことは出来ないのではないかと思いました。それは多くの人に涙と啜り泣きをもたらしたのです。

Phil でも、彼はフランシスコの五つの傷を持っていたのでしょうか。

Theo 確かだとあえて断言する気はありません。ただ、手と足に何か青ざめたような痕跡が現れていましたし、その衣は左側に小さな穴が隠されていました。しかし、私は目を凝らしてしっかりと見たというわけではありません。なぜな

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

らば、このようなものに対する好奇心はとても災いであると彼らは主張しているのです。

Phil でも、そこで誰か笑っていたことにあなたは気付きましたか。

Theo 気付きました、しかし、それは異端者だと思います。なぜならば今は、地上には異端者が大勢居るからです。

Phil テオティムスさん、率直にあなたと話したいので申し上げますが、もし私がその見世物に参加していたとしたら、私だってほとんど笑いを抑えられなかったでしょうよ。

Theo 願わくは、同じ病気であなたまで駄目になってしまわないように。

Phil テオティムスさん、その心配は無用です。だって、私は子供の時からこの世的に言えば教養も知恵もなく、底知れないこの世の欲望に対して禁欲をし、神に最も愛された聖フランシスコを心から常に敬虔に尊敬してきたのですから。そして、彼の足跡に心から従おうとするすべての人は、この世に死に、キリストに向かって生きることを熱心に求めるのです。ですから、私は衣服のことなどは構わないのです。しかし、私はどんな衣服が死人に着せられたのかを学んでうれしく思います。

Theo 豚に真珠を差し出すべきではありませんし、犬に聖なるものを与えるべきではないと主御自身が教えておいでのことはご存知ですね。更に、もしあなたがその笑いの理由をたずねるようであれば、私から何も聞いていないこととなりますね。しかし、また素直に真剣にあなたが学びたいとおっしゃるのであれば、私が彼らから何を学んだのか喜んでお分けしましょう。

Phil 熱心で、真面目で、よい生徒になりましょう。

Theo ある人たちは、華美に葬られるのでなければ、自分が十分に自信をもって並みでない生き方をしてきたことにはならないというような野心を持ち続けているのに気をつけてください。彼らは死ぬことなど考えもしないで、むしろ生きながら未来の葬列の喜びや楽しみを先に想像しているのです。私の意見では、そのような否定さるべき感情が何であれ、それも一応は信仰のある側面であるということは、あなたも否定はなさらないでしょう。

エラスムスの *Exequiae Saraphicae* (1531) について

Phil 葬列のうぬぼれは、他の理由で避けることは出来ないとも思います。しかし、もし君主が死んで、つまらない亜麻布で包まれ、下層の死体運搬人によって一般の死体とともに普通の墓に葬られれば、それはもっともっと尊敬すべきことだと私には思えるのです。ですから、あのエウセビウスが葬られたのと同じように葬られた人達は、生きていた時よりもずっと高慢になってしまったように思えるのです。

Theo 良い心でなしたことであれば、何であれ神はお喜びになります。しかし、人間の心を裁くことは神のなさることです。ところで、今まで私が語ったことは取るに足りないことでして、他にもっと重要なことがあるのです。

Phil 何でしょうか。

Theo 死の前に彼らはフランシスコ会の会則を告白するのです。

Phil エリシウスの地域では当然そのようにします。

Theo いや、そうではありません。ここでは、もし彼らが元気を回復すれば、そうするのです。医者に見離され、聖なる衣が用意されても、神の助けで回復することがしばしば起るのです。

Phil その衣を着ない人にだって同じ事は生じますよ。

Theo 人は信仰の道を率直に歩まなければなりません。もしそのことで格別な実りがなかったとしたら、特にイタリア人の中に生まれて、学問においても高貴な多くの人達が、聖なる衣に包まれて埋葬されることを求める者はいないでしょう。それに、あなたは知りもしない人の例を否定したりはしないでしょう。あなたが非常に価値を認めているその人、クリストフォルス・アグリコラもそのように葬られたのです。

Phil 瀕死の状態にある時に何が人を狂わせるのかというようなことは私にとってどうでもいいのです。あなたに教えて欲しいことは、人間に死の恐怖がもたらされ、確かな人生への絶望によって驚愕したり、取り乱したりすることが公になったり、そのような様子になるというのは何という大きな善であるかということなのです。健全な思慮深い心で、適当な時期に熟慮してなしたのでなく、傲慢さや欺瞞や強制でなしたのであれば、誓願されたことは無駄なことで

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

ありますし、そのようなことがないために修練の期間が過ぎていなければ、誓願を義務づけることはないのです。その時にはじめて、頭巾のついた修道服を着用するように命じられるのです。というのは、かの熾天使のような人達がそう言ったのです。それゆえ、もし彼らが生き返ったとしたら、彼らは、二つの理由により何の束縛もうけていないこととなります。つまり、死の恐怖、生への希望の故に驚愕してなしたのは本当の誓約ではありませんし、頭巾をかぶる前には誓約に縛られることもないからなのです。

Theo 義務を負う場合は、いつでも確かに自分が義務を負わされていると考えるものですし、全き自由意志からする人の判断は神に最も喜ばれるものとなるのです。たとえ私達が他のものを称えるとしても、修道士の善行は他のものよりもっともっと神に喜ばれるものなのです。なぜならば、それは最良の土台から出ているという理由によるのです。

Phil 自分の判断では何一つ出来なくなっている時に、すべてを神に委ねるといようなことがそんなに価値のある事として探求する気は私にはありません。私は、キリスト者というのは洗礼の時に各々自分をすっかり神に委ねていると思うのです。その時に、彼はあらゆる華美やサタンの意志を拒否し、キリストを指揮者とするのです。そして後、彼は生涯を通じてキリストの兵士となるのです。それに、自分のためにではなく彼のために死んでくださった方のために生きようとして、キリストとともに死ぬ人について語っているパウロは、修道士についてではなくすべてのキリスト者に関してそのことを語っているのです。

Theo 洗礼についてはおっしゃるとおりです。しかし、以前は瀕死の床にある者に洗礼を授けたり洗礼水を振り掛けたりしたものです。それによって、永遠の生命への希望が与えられるためなのです。

Phil 司教が約束したようなことなどそれほど大切なことではありません。神が示そうと欲しておられることは、私達には確かではないのです。もし、このように水を撒き散らすことで突然天国の民になることが確かであるとしましたら、その全生涯を通じてこの世の欲望に捕えられている人間が不敬な欲望に仕え、それ以上罪を犯す可能性がなくなった時に、ついにほんの少し水を振り掛

エラスムスの *Exequiae Saraphicae* (1531) について

けることを利用するというのは、何という大きな窓が開かれていることでしょうか。もしその誓約が、そのような洗礼と同じものであるとしたら、それは罪深い生き方をした人達にとっては何と立派な決定となることでしょうか。彼らは決して滅びはしないのです。つまり、サタンに対して生き、キリストに対しては死ぬのです。

Theo 熾天使的な秘儀を明らかにすることが何か適当なことではないとしても、彼らの誓約は洗礼よりももっと効果があるのです。

Phil 何ですって。

Theo 洗礼においては多くの罪過が洗い流され、清い魂だけが残るのですが、しかし、欠けているものがあるのです。誓約をする人は会の卓越した功績全体によって即座に豊かにされるのです。勿論、彼は最も聖なる集団の身体の一員となったからです。

Phil 洗礼によってキリストの身体と一体にされた人は、頭からも、身体からも何も受けることは出来ないのですか。

Theo 善行や愛に値しないのであれば熾天使たちの集めた宝から何もうけることは出来ません。

Phil そんなことを啓示したのはどんな天使なのですか。

Theo ああ、友よ、天使ではありません。キリスト御自身がこのことやその他のことをご自分の口で親しく聖フランシスコにお示しになったのです。

Phil 友情によってお願いします。そんな話をして私をわずらわさないでください。

Theo それは最も秘められた神秘なのです。それを世俗的なことと一緒にするなどあってはなりません。

Phil 友よ、だれが世俗的なのですか。私は熾天使集団より他にもっとよい修道会など求めたことはありません。

Theo しかし、あなたは時々彼らを憎しみでもって酷評しているではありませんか。

Phil テオティムスさん、それは親しみのしるしですよ。彼らの陰に隠れてひ

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

どい生き方をしているような人以上にその修道会を傷つけているものなど他にありませんよ。その修道会に最もよかれと願っている人は誰でもその破壊者に対しては激しく激怒するのが当然でしょう。

Theo 私はその大切な秘密をべらべらしゃべってフランシスコの怒りを買うのではないかと心配になってきました。

Phil 最も罪のない人からどんな災いがくるのを恐れるのですか。

Theo どんなですって、私の目をくりぬくのではないのでしょうか、また私の魂を取り去ってしまうのではないのでしょうか。彼の五つの聖痕をののしった多くの人がそのように扱われたというようにです。

Phil 聖人達は、天上では地上にいた時よりも悪くなるものなのではないのでしょうか。フランシスコは柔和な性格であったので、道をやってきた少年たちが彼の背中の田舎頭巾に入ったチーズ、ミルクの中にガラクタや石ころを混ぜた時ですら決して怒らず、陽気に喜んで歩いていたと聞いています。今では短気になり、復讐者にでもなったというのでしょうか。また、他の時仲間から盗人、瀆聖者、人殺し、淫乱、大酒飲み、それに集められる限りのあらゆる冒瀆的な悪口を聞いた時、恐縮して感謝したというではありませんか。その人が嘔吐きだなどと抗弁したりしませんでした。なぜそうなのかと仲間が不思議がると彼はこう言ったというのです。「もし彼が大変な好意を持って私に注意してくれなければ、私はそのすべてのことと極悪なことを受け入れていたかもしれませんが、ですから、何故今ごろになって彼が復讐者になったりするのでしょうか。

Theo そのとうりです、天国で統べ治めている聖人達が侮辱されることを望むことなどありません。コルネリウスより柔和なものが何かあるのでしょうか。アントニウスより従順な者があるのでしょうか。これまで生きたものの中でバプテスマのヨハネより謙遜な者がいたのでしょうか。彼らが正しく敬慕されないとすれば、今こそ彼らは恐ろしい災いを生じさせるでしょう。

Phil 私は、彼らが災いを生じさせるよりも、むしろ取り去ることをもっと容易に信じましょう。あなたが私に語ってくれたことは世俗的な人間について言っているのではないのですよ。あなたは私が黙って聞くと思ったのですね。

エラスムスの *Exequiae Saraphicae* (1531) について

Theo では、あなたを信頼して、それに関係あることを語りましょう。フランシスコよ、お願いします。あなたと慈悲深いあなたの兄弟たちによって私の語るべきことをふさわしく聞かせてください。公にされず、完全な人達の間だけで密かに語られていた隠された知恵がパウロにあったということはあなたもご存知ですね。そのように彼らもどんな人のところでも公にされるのではなくて、聖なる寡婦、その他の信仰深い人、熾天使の集団に好意的に選ばれた人々に与えられる秘密を持っているのです。

Phil 私は第三の天での啓示 (*τρισαγίας αποκαλύψεις*) を思い出しているのですが。

Theo 始めに主は熾天使の群れが大きくなるということ、そして彼らにはその糧が十分に与えられるということを予言したのです。

Phil そこですぐに、日々そのような人々が増えて、人々を煩わせるようなことを強調する人達に非難することが禁じられたというわけですね。

Theo 続いて明らかにされたことは、毎年、フランシスコの祝祭日にはただその聖衣をまとっている兄弟たちの魂だけでなく、その修道会に対して好意を持つ者、会自身のためによく尽くすすべての人の魂が煉獄から解放されるということです。

Phil それで、キリストが彼と親しく談笑でもするのでしょうか。

Theo そうでないことがあるのでしょうか。父なる神がモーセと親しく語らうのと同じように彼は友人や仲間と語りあうのです。モーセは神から人々のところへ律法を託され、それを伝えました。キリストは、福音の教えを知らせました。フランシスコは、自分の規則を天使の手によって二度も熾天使僧団にもたらしめたのです。

Phil 三つ目の啓示はどうなっているのでしょうか。

Theo かの優れた師父は、蒔かれたよい種が悪いものによって駄目にされることを恐れておられました。そして、小麦が毒麦と一緒に滅ぼされてしまうことも恐れたのです。主はその心配を彼から取り除かれ、最後の審判の日に至るまで破れ靴を穿き、綱の帯を締めた人が背くことのないようご自分で守られると

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

約束なされたのです。

Phil 何と慈悲深い主よ。神の教会については違った仕方で論じられるというのに。まあ、でも御続けください。

Theo 第四に明らかにされたことは、不敬な生き方をする者は誰もその修道会の中で長いこと持ちこたえることは出来ないということです。

Phil 不敬な生き方をしたからといって、誰でもが修道会に背いたというわけではないのですね。

Theo いえ、そうではありません。なぜならば邪悪な生き方をした者が、直ちにキリストを拒絶したということではないからです。一方口で告白したことをその行為によって否定する者は、他の方法で神を否定していることになります。しかし、聖なる衣服を軽んずる者は誰でも、その人は取り返しのつかないほどに修道会から見放されることになります。

Phil では、すべてのコンベンツァル修道院についてはどういふべきでしょうか。彼らは財産を持ち、大いに酒をのみ、サイコロ賭博を楽しみ、娼婦を買い、家で公然と妾を囲うようなことをしています。これ以上何か言う必要があるでしょうか。

Theo フランシスコは決して彼らと同じような色の衣服は身につけませんでした。彼はもっと黒いものを着ていましたし、真っ白い麻布で作られた帯など決して用いませんでした。ですから、彼らが戸をたたく時次のように言われるでしょうよ。「私はあなたがたを知らない」なぜならば、彼らは結婚の晴れ着を持ち合わせていないのですから。

Phil 他にも何かありますか。

Theo まだあなたの聞いていないことがあります。第五番目に啓示されたことは熾天使僧団に対して悪意を持つ者は—ああ、そんな人たちは大勢居るのですが—死にいたるまでに、神によって定められた年齢の半分にも達することはないということです。彼らは最も早い死よりももっとひどい死に方をするのです。

Phil 他の多くの人の場合でも同じ事が起るのを見てきましたよ。つい最近も枢機卿マテウスに起ったのです。彼は半分裸足のかの修道会のことを最も悪く

エラスムスの *Exequiae Saraphicae* (1531) について

言い、考えていた人です。私の見たところでは、彼は五十歳になる前に死んでしまったのです。

Theo 確かにそうです。でも、その人はドミニコ会をも攻撃していました。いずれにせよ、富が教皇の心を捉えてしまった時に、ベルンの四人のドミニコ会士が火刑に処せられたのは特に、その人の努力によったということです。

Phil しかし、彼らが奇妙で、しかも不敬な物語を語ったからなのでしょう。つまり、でっち上げた幻と奇跡でもって聖母も原罪で汚されているということや、聖フランシスコは本当はキリストの聖痕など持ってはいなかったことや、シエナのカテリナこそ真実に聖痕を持っていたということ、そしてそのようなことをこの喜劇のために密かに用意された改宗信徒に完全に約束されたこととして説得しようとしたのです。このインチキのために主の身体を用い、ついには棍棒と薬物をも用いたのです。要するに、この企ては、一修道院のものではなく、修道会全体の長達のものであると彼らは公表したのです。

Theo それがいかなるものであるにしろ、神は理由もなく次のようなことは言われません。「私が油注いだ者に触ってはならない」と。

Phil 他にまだ残っているものがあれば、知りたいものです。

Theo 六番目の啓示が残っています。主は熾天使僧団の保護者はたとえどんなに不敬な生き方をしている、いつか主の憐れみを受けるであろうし、不敬な人生も最後には幸福に閉じるだろうと約束されたのです。

Phil たとえ、姦淫にとらわれている者が滅ぼされるとしてもですか。

Theo 主が約束されたことで確かでありえないものはありません。

Phil でも、結局どんなことで彼らが好意的であるとか、親切であるとか判断するのですか。

Theo ああ、そのことでしたら、与える者、着せる者、食物を用意する者はみなずっと以前から愛していることになるのです。

Phil 戒めたり、教えたりする者は愛してはいないのでしょうか。

Theo そのようなことでしたら家の中に満ち満ちています。そのような種類の善行は、彼らの習慣では、他人に施すものであって、他人から受けるものでは

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

ありません。

Phil だから、主は御自身の弟子に対してよりも、フランシスコの弟子達に対して多くを約束されたのですね。もし、どのキリスト教徒に対してもなしている彼の善が、自分自身のためだとすれば、自分が受けるために苦しんでいるということになります。しかし、悪い生き方をしている人に主が永遠の生命を約束されたということはありません。

Theo 驚いてはいけません。というのは、福音の最大の力がこの修道会を保護してきたのですから。ともかく、第七番目の啓示を聞いてください。

Phil そういたしましょう。

Theo 主は、熾天使僧団の服装をして死んだ人は、誰であれ、ひどい死に方はしないとも約束なさいました。

Phil ところで、ひどい死に方というのはどういうことなのでしょう。

Theo ひどい死に方というのは、その魂が身体を離れるとまっすぐに冥府の世界に迷い込み、そこから決して贖いだされることがない死なのです。

Phil では、その衣服が煉獄の火から解放してくれることはないのですか。

Theo だめです。聖フランシスコの祝祭当日に死ぬのでなければ。でも、冥府から救われるだけでは不十分だと、あなたは考えておいでなのですか。

Phil いえ、確かに十分だと思いますよ。しかし、既に死んでしまった人に聖なる衣があてがわれるということについてはどう考えるべきでしょうか。彼らはそれを着て死ぬわけではないのですから。

Theo もし生きている時にそれを得たいと思うのでしたら、善い業のための意志が求められます。

Phil 私がアントワープに居りました時ですが、ある瀕死の婦人の親戚の家に居たのです。ちょうどそこに敬うべきフランシスコ会の人居合わせたのです。彼は、既に口を大きく開いている婦人を見て、彼女の一方の腕を彼の衣で包み、肩のかなりの部分を覆ったのです。そこで、ある人々はその婦人の全体が冥府の門から守られるのか、それとも一部だけが守られるのかと疑問を持ったものです。

エラスムスの *Exequiae Saraphicae* (1531) について

Theo すべて守られるのです。洗礼の時にも人間の一部分だけが水で濡らされますが、全体がキリスト教徒にされるのと同じ事です。

Phil 悪魔がその衣をそんなに恐れるとは不思議なことです。

Theo 悪魔はそれを主の十字架よりも恐れているのです。エウセビウスが運ばれる時、私、いや私だけではなく、その死体に蠅のような黒い悪魔の群れが襲いかかるのを見たのです。しかし、誰もあえて触ろうとする者は居ませんでした。

Phil その間も、彼の顔、手、足はむき出しのままだったでしょうから、危険でしたでしょうね。

Theo 蛇が長くのびたトネリコの木影に耐えることが出来ないように、悪魔は、その聖なる衣の毒気を遠くからもさえ感ずるのです。

Phil 死体が腐るのはそのためだとは思えません。要するに、悪魔よりも虫の方がもっと力があるのですよ。

Theo そのとおりですね。

Phil 聖なる衣の中で永遠に生きる虱は何と祝福されていることでしょうか。ところで、衣が墓に運ばれた後は、何が魂を守ってくれるのですか。

Theo 衣が死霊を自らに伴っていき、守ってくれるのです。ですから、かの修道会の方達は誰も煉獄の火に落ちることなど考えてもおりません。

Phil あなたのおっしゃることが正しいとすれば、私はヨハネの黙示録よりもこの啓示のほうをもっと尊重しなければいけませんね。それこそが安全で、しかも容易な道のように思えるのです。努力することも無し、骨折することも無し、告解も無し、それでも永遠の死を逃れることが出来るのですから。厳しい全人生は享樂のうちに楽しく過ごせるといふわけです。

Theo 賛成です。

Phil ですから熾天使僧団にどんなに多くの人に加わっても私は驚きはしないのです。しかし、彼らを嘲る人達がいなくなることもないという事実も驚くことではありません。

Theo どんなに嘲る人が多くても、彼らは悪意に引き渡された者であり、悪意

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

の故に何もみえなくなっているのです。そのことをあなたは当然知らなければなりません。

Phil これからはもっと注意しましょう。そして、聖なる衣を着て死ぬように努力することにしましょう。ところで、最近になって、人間はどんな業の助けにもよらず、ただ信仰のみによって義とされるなどと教える者が現れてきました。ですから、信仰無しに、衣によって祝福されるのでしたら、それは最高の特典といえるでしょう。

Theo フィレコウスさん、間違っただけではありませんよ。それは単純に信仰無しでというわけではありません。ただ、私達が語ってきたのは、キリストによって師父フランシスコに約束されたものだと思っただけで十分だということです。

Phil では、その衣はトルコ人をさえも救うのでしょうか。

Theo 勿論です。もし、衣が着せられることを受け入れ、啓示を信じさえすれば、たとえ悪魔でも救われるのです。

Phil あなたはもうすっかり私を手なずけてしまいました。でも、なおもう一つだけ気がかりを取り除いて欲しいのですが。

Theo どうぞ、おっしゃって下さい。

Phil フランシスコはご自分の生き方を福音的と呼んでいたと聞いたことがあるのですが。

Theo そのとおりですよ。

Phil しかし、私はすべてのキリスト者が福音の教えを告白していると思うのですが、では、もし自分の生き方が福音的であるというのであれば、キリスト者がいかに多かろうとも、当然その人たちはフランシスコ会士でもあるということになりますね。その人達のうちで、キリストこそ使徒達や最も聖なる母と共に第一の座を占めることになりますね。

Theo あなたは、フランシスコがキリストの福音に何かを付け加えなかったかどうか問いたただきたいのですね。

Phil いったいそれは何なのですか。

Theo 灰色の衣、麻の縄、それに裸足です。

エラスムスの *Exequiae Saraphicae* (1531) について

Phil その印でフランシスコ会士と福音的なキリスト者とを識別するのですね。

Theo それだけではなく、彼らはお金に触れることも避けています。

Phil しかし、フランシスコが禁じたのはお金を所有することであって、触れることではないと聞いていますが。ところで、主人、支配者、債権者、相続人、あるいは代理人のような人達はお金を受け入れます。その時に、もし彼らがそれに触らないよう、手袋をして数えたとしたら、それでも受け取ったと言われるべきなのではないでしょうか。受け取ってもいないということは、即ち触ってもいないという新しい解釈になるのですよね。

Theo 教皇ベネディクトはそのように解釈しておりました。

Phil 教皇としてでなく、フランシスコ会士としてですね。最も尊い方達は旅をする時でも布に包んだお金など受け取りはしませんよね。

Theo 必要に迫られれば、そうすることもあります。

Phil 福音的な教えを汚すより死ぬ方がましなのでしょう。結局、どこでもその代理人から受け取っているのではありませんか。

Theo それがどうしていけないのです。沢山与えられることも特に珍しいことではありませんよ。

Phil でも、おきては「自分でも、他人を通してはいけない」と教えていますよ。

Theo しかし、彼らはお金に触れてはおりません。

Phil 馬鹿馬鹿しいことです。触れることが不敬なことであるとしても、結局他人を通して触れているではありませんか。

Theo しかし、代理人との取り引きがそれと関係があるのですか。

Phil ないとおっしゃりたいのですか。それをしたのはそれを欲しがった人です。

Theo キリストがどこかでお金に触れたなどということは読んだことがありません。

Phil たぶん子供時代のキリストが両親の使いで油や酢やオリーブ等の買い物に行ったとしてもそうでしょうよ。ですが、ペテロやパウロがお金に触れたの

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

は議論の余地もありません。触ることを拒むよりお金そのものを拒絶することこそが信仰の賞賛に値するのです。ところで、お金よりも酒に触れることの方がもっと危険だと思うのですが、なぜ彼らはその危険を恐れないのでしょうか。

Theo フランシスコが禁じていないからです。

Phil 彼らは柔らかく、美しく洗練された女性の挨拶にはすぐ手を伸ばします。ところが、物欲しそうに他人の財布を覗き込んでいて、たまたまお金が提供されるとなると、とたんに尻込みして、十字を切ったりして自分を守ろうとします。何と福音的なことか。フランシスコはすべての学問に通じていなかったかもしれませんが、しかし、何がなんでもお金に触れることを禁じるほど分別がなかったとは思えません。ただ、裸足で歩くことを命じられた人々が大きな危険にさらされないためにそうしているのだとしても、地面に落ちているお金を不注意にたびたび踏むことがあるのを避けることはほとんど不可能なことです。

Theo しかし、手で触れることはしません。

Phil 触れるというのは全身に関わっていたのではありませんか。

Theo ですから、もしもそのようなことが起ったら、彼らは告白すること無しにミサにあづかることはいたしません。

Phil ああ、何と敬虔な。

Theo 皮肉はさておき、事実はどうなのかお話ししましょう。お金というのは多くの人達にとって最も大きな悪の機会であるのですし、これからもそうでしょう。

Phil 私も同感です。しかし、同じお金が他の人にとっては大きな善の材料にもなります。つまり、富を愛することが禁じられているのは読んだことがありますが、お金が悪い等ということを読んだことはありません。

Theo そのとおりです。でも、貪欲という病からしっかり離れているように触れることが禁じられているのです。それはちょうど、偽証に陥らないために、福音書の中で誓うことが禁じられているのと同じです。

Phil では、どうして目にすることが禁止されないのですか。

エラスムスの *Exequiae Saraphicae* (1531) について

Theo それは、目より手を抑えることの方が簡単ですから。

Phil しかし、その窓を通して死が入ってきたのですよ。

Theo それゆえ、真実のフランシスコ会士たる物は頭巾を眉毛のところまで真っ直ぐに引き下げ、地面を凝視して道以外の物が見えないように歩くのです。それはちょうど、荷車を引いた馬が両側から口籠をかけられて、足の前にあるもの以外どんなものをも見えなくされているのに似ています。

Phil ところで、ある特権が教皇によって与えられることは規則で禁じられているというのを見たことがあるのですが、それは本当かどうか、どうぞ教えてください。

Theo そのとおりです。

Phil それでも、私は次のようなことを聞いたことがあるのです。どんな種類の人にも、その人達が自分の考えで誰かを否認したり、毒で殺したり、異常な危険を伴うことなく生きたまま埋める事が赦されるほどに多くの特権は与えられていないと。

Theo あなたがお聞きになったのは決して偽りの話ではありません。決して嘘をつかないあるポーランド人が私に語ったのですが、その人は酔ってフランシスコ会の寺院で眠り込んでしまったそうです。すると、隅の方の穴のあいた板の間から女たちが現れたというのです。夜の祈りで目が覚めたのだそうですが、彼はあえて出て行きませんでした。晩禱がいつものように終わると、兄弟達がすべてその低い所に降りてきました。そこには、ちょうどよい深さと広さの深みがあったのです。背後から手を縛られたある二人の青年が立っていました。服従や功績についての短い説教がなされ、さらに神の前でのあらゆる罪の赦免が約束されました。さらに、幾分かの希望が述べられます。つまり、その兄弟達が自発的に穴の中に降りて行って、仰向けになれば神は兄弟達の心を同情へと変えるだろうというのです。そのとうりに彼らはしました。すると梯子が取り去られ、みんな一緒にその中へ土を投げ入れたのです。

Phil 見ていた人はその間、黙っていたのですか。

Theo 勿論です。もし彼が出て行けば、三人目の人としてその穴の中に加えら

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

れるのを恐れたからでしょう。

Phil そんなことさえ、彼らには許されているのですか。

Theo そうです。会の評判が危うくなるたびにそうするのは。それで、その人は逃げ出すや否や、あちこちの宴会や至る所で、その見たこと、熾天使僧団の非常な悪口を言い広めたわけです。生き埋めにされるよりましだったのではありませんか。

Phil 多分そうでしょう。しかし、その厳格さは別としても、その師父は裸足で歩くことを命じていたのに、今はたいていサンダルで歩いているのはどういうわけでしょうか。

Theo 二つの理由からその命令は柔らげられているのです。一つは、気がつかないでお金に触れることのないためであり、もう一つは、冷氣、棘、へび、尖った石や、似たような物で傷つくことのないためなのです。というのは、彼らは世界中を旅して回るのですから。それだけではなく、規則の犯し難い威厳はサンダルが裸足を示すという代喩でもって見たされております。

Phil 彼らは、自分達を福音的に完全な者と自称してはばかりません。それは彼らの言うところでは、福音的教えに根差しているからということなのですが、それについては識者達の間で大いに激しく論じられていることでもあるのです。福音的完全ということについて言えば、それは一つでなく、人生の様々な状況の中にその場を持ち得ているのです。あなたには福音の教えの中でどれが最も完全なものだと思われますか。

Theo マタイがその第五章で明らかに示していることのすべてだと思います。その中でも、終わりの章句だと考えます。つまり、「あなたの敵を愛しなさい、あなたを憎む者に親切にいなさい、あなたを迫害し、悪たくみをする者のために祈りなさい。天にいるあなたの父の子となるためである。父は、善人の上にも悪人の上にも、御自身の太陽を昇らせ、義しい人にも義しくない人にも雨を降らせる。だから、あなたがたの天の父が完全であるように、あなたがたも完全なものになりなさい」です。

Phil まったく同感です。ところで、父はすべての者に対して富んでおられ、

しかも気前のよい方ですから誰かから物乞いなどしたりはしません。

Theo 彼らとて気前のよい人たちです。ただ、それによって彼ら自身が豊かにされるような祈りや善い業という霊的富においてですが。

Phil 願わくば、彼らの中に福音的愛の実例が豊かにありますように。呪う者を祝福し、不正な者に好意を与えるように。フランシスコ会士やドミニコ会士の誰かを傷つける方が、有力な君主を傷つけるよりもっと安全だなどというかの有名な教皇アレクサンデルの話はいったいどうなっているのでしょうかね。

Theo 修道会の威厳を傷つけた者が罰せられるのは当然です。その小さな者一人にたいして為したことは、修道会全体に対して為したのと同じなのです。

Phil しかし、なぜ一人の人に為したことが修道会全体にたいして為したことより小さなことではないのでしょうか。また、一人のキリスト者が傷つけられたからといって、全キリスト教界を復讐へと駆り立てることはないのでしょうか。たびたび鞭打たれ、石を投げられたパウロは、なぜ使徒的威厳に対する凌辱者を罰するために援助を求めなかったのでしょうか。「受けるよりも与えるほうが幸いである」という主の言葉に従うとすれば、確かに善く生き、教え、困っている人々に与える人のほうが安全なのです。要するに、パウロが無報酬で福音を伝えたことをいくら自慢しても無駄だということです。それに、もし非難が襲ってきてもカッとならず、悪を被ってもなお愛の感情を保持するなら、その人は自分に対する賞賛を増し加える良い例であると思えるのです。ただ、復讐したいという欲求を持っている時に、多くの人から賞賛を得ようとしてその可能性を放棄するとしたら、それが何か偉大なことでしょうか。縄の帯を締め、至る所で半分破れたようなサンダルを履いているということは大きな富です。しかし、主が完全なものと呼び、使徒たちがいつも示そうとしていたことを現しているのは彼らの中でも実にまれなのです。

Theo 彼らについて言い広められた不敬な話については、私も知らないわけではありません。しかし、私は次のように感じてきたのです。つまり、私がかの聖なる衣を見る時には神の天使が近づいてきたと思いましたが、彼らの足がしばしばその門の前を通る家は何と祝福されているのだろうか。

エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について

Phil 彼らが親しくしている場所では不妊の女など非常に少ないと私は考えております。しかし、テオティムスさん、今日まで多くの過ちの中に居た私に対してもフランシスコは大変慈悲深いかも知れません。今まで私は着る人の聖さによって高められるのでなければ、衣それ自体が水夫や靴屋の衣服よりすぐれているというようなことはないと考えておりました。それは、キリストの衣類に触れた女が流血を癒されたのと同じなのです。要するに、私は織る人や、紡ぎ、縫う人が衣服に力を与えたなどということを疑っていたのです。

Theo 形を与える者は力をも与えるのだ、というのは疑いのないことです。

Phil では、私はこれからもっと楽しく生きていくことにしましょう。地獄の恐怖に苦しむこともなく、告白を嫌がることもなく、告悔の呵責に苦しむこともなくなるでしょう。